

「諏訪藩に伝わる『鷹書』の翻刻と注解」

『鷹書』大―(六)―

代表 堀内 勝*

メンバー

大橋 和 華**

小瀬 園 子***

箕浦 芳 浩****

(五十音順)

Verification, Translation and Notes of
“The Large Book on Falconry”
Transmitted Through the Suwa Fief
(6th Part)

Masaru HORIUCHI*

Waka OHASHI**

Sonoko OSE***

Yoshihiro MINOURA****

はじめに

過日我々メンバーは岐阜県川島町にある内藤記念くすり博物館を訪れた。今回、及び次回の鷹の傷病の治療法が民間療法に通じ

ており、いくらかでもその知識が参考になれば、との願いから定例の読書会の日をそれにあてたのである。

このくすり博物館は木曾川の中洲にある薬剤会社エーザイの広大な敷地内の一角を占めている。六階建ての本館と傍らに巨大な温室、手前に広く薬草園が広がっており、珍しい薬草類が生そのまま見、触れることもできる。

入口では中国の病魔除け神獣である白沢が迎え、広いロビーには薬茶が自由に飲めるようになっていいる。大ホール・小ホールが設けられ、展示室は一、二階が広くとられており、そこには江戸時代を中心とする伝統の製薬法と道具、原料である生薬類、薬の宣伝チラシや看板、オランダ医学の資料、さらに調査にかかせない秤類まで目にする事ができる。

また二階には企画展のコーナーもあり、幸い「女・こども・男のくすり」をテーマに開催中であって、昔懐かしい中将湯とか実母散の紙袋や、はしかとか疱瘡の送り出し絵、強壮薬としての生薬など珍しい知見を提供してくれた。

この博物館では薬草栽培教室や薬膳料理のサーヴィスも行っていたが、土日は二〇名以上の予約が必要ということであったため、これに加

* 国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

** 前人文系列 (Former Department of Liberal Arts and Sciences)

*** 前非常勤講師 (Former Part-time Lecturer)

**** 吉田流鷹匠 (Falconer, the Yoshida method)

われなかった。

なお四階から六階の付設図書館には膨大な薬学関係の本が収められ、整理・復刻を待つ手書の写本類も多くあり、この博物館は三〇周年記念事業として蔵書目録を出す予定とのことであった。なお蔵書の中に、いくらかの鷹狩関係の資料もありいずれ詳しく調べたいと思う。

* * *

今回翻刻した部分は、原書三三六頁中、九六頁八行目より、一二三頁一行目であり、漸く中程まで達したことになる。今回の部分には節題が欠如しており、内容から「鷹の傷病とその治療法」と、また節数は前から引続く形で第四十節とした。前節末には「巻五終」との明記があったが、今回終りの部分には何の注意書もない。一二三頁二行目から「灌頂巻」が始まる。従って、今回の部分は「巻六」としておく、この巻六は全篇、鷹の傷病とその治療についてであり、内容をまとめて節にするという工夫は見られず、傷や病を一つずつ挙げて、その対処法について脈絡なく述べている。従って復刻するに当たり段落をつけ、節で区切るわけにもゆかず、それ故、註は通して三桁に、三百台を超えることになったしまった。改めて一書とする際にはひと工夫してみたい。

内容は民間療法と同じく、科学的ばかりでないところが興味深く、一つ一つの傷病及びその治療法の記述の推定・判断に議論百出して、多くの時間を費した。さまざまな資料に当たっても参考にならないものもあり、結局分からずじまいのものも多々出てしまった。鷹匠自身の知識と経験、仲間や先輩達からの話、その何代

にもわたる経験の蘊畜があるいは書き留められ、あるいは半ば公の秘伝となって伝わったものであろう。多くは人間に適応したものを平行移動したことが考えられる。薬草類や生薬、鉱物などの鷹への応用、さらに灸を用いての治療など、その療法の広さには驚かされる。特に灸の応用には本文にも四枚図を入れたが、長い経験が生かされ、我が国独自の領域であらうと思われる。また犬の毛や血、猫の頭や膝、ネズミの股、馬の爪などばかりでなく、人のふけや垢、赤児の大便やへその緒などの利用もあり、何気ない、或いは思いつきの発想が効果を生む経験につながったことを想起させ、こんな所にも鷹と鷹匠の日常的接近の近さを感じさせもする。

* * *

鷹類の傷病及び治療は、中東アラブ地域にも鷹書の中に特に後半・末尾に集中して章節に分けての記述があり。その関心度が伺われる。我が国のそれが、中国医薬に加えて、江戸期までの知見の蓄積であるのと対照的に、アラブのそれは、メソポタミア、ササン朝ペルシャ、ビザンチン世界の大文化の影響のもと、アッバース朝の知見をピークに成り立っているものと思える。

鷹の病 *marad* (pl. *amrad*)、傷 *jarh* (pl. *juruh*, *ajrah*)、それらの知識 *'alamah* (pl. *'alamat*)、原因 *sabab* (pl. *asbab*)、徴候・症状 *daliyah* (pl. *dala'iyah*)、手当・治療法 *'ilaj*、薬 *dawa* (pl. *adwiyah*) などに区切られ、さらに翼や呼吸器官などの部位 *jihaz* (pl. *ajhizah*) 別にそれぞれの節を設けて論じられている。個々の事例については次節に譲るが、鉱物が多用されているのは、

如何にもアラブ・イスラムの、より科学性を重んずる特徴と言える。

sab 明礬（口内肉芽種障害に対して）、*ru' al-kibrit* 硫黄酸（脚や青嘴上の疱瘡の焼灼に）、*shadhir* アンモニア塩（体内の脂肪除去、吐剤）、*sukkar nabat* 砂糖粒（消化を早め、初期の傷病に対して）、*al-tin al-Armani* アルメニア土（胸の痛み、打撲、太り過ぎ、痩せ過ぎ対策に）、*ya'ra* には *mumiyah* ミイラの粉末を調製した薬（筋肉消耗、翼羽の欠脱に有効）などもある。

本文、注④、⑤にある趾屈症はアラブの鷹にも繁く見られ *namlat*（原義 ちくちく／ひりひり刺す／痛む）と呼ばれる。

（写真2、3を参照）患部がものに触れると痛みが走るからである。この治療は未だ熱さない緑色のイチジク *tinah khadra* をもぎ取ってその汁を患部に時間を置いて三度塗ると治る、とされている。今では切開手術が行われることが多い。日本では藤とか天南生が用いられるが成分的にも似た要素があるのかも知れない。

なお、注解中の略号（放）は、『放鷹』（吉川弘文館、昭和五十八年発行）のことである。

- ① 卷六の冒頭にあたる部分であり、内容的にも、ここから鷹の病と薬に関する記事が始まっている。流れから言えば④節の題目が入る筈である。題目抜けか乱丁があったものと思われる。
- ② くさ(臭)き餌 古くなり傷んで臭い餌。
- ③ 寝髪をもちす(梳) かず 寝起きで髪も櫛けずらないまま鷹を扱うことを戒めている。清潔な状態で、気を入れて鷹に立ち向かうべきなのである。
- ④ あひ(浴)せず 水浴びをさせない。

図 I

卷第五百四十八

荒井流鷹書

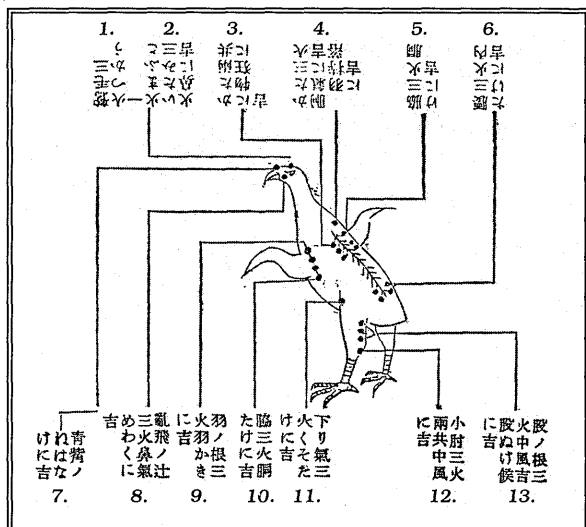


図 II

四百二十六

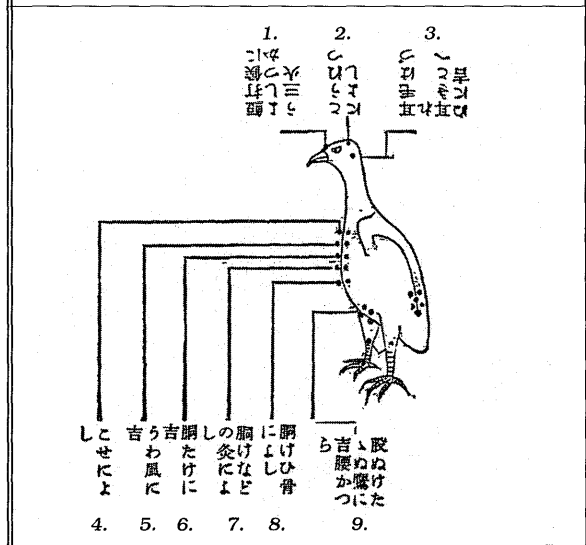


図 I・II・IIIは「新井流鷹書」
 (『續群書類従』 卷第五百四十八) による。

④ (鷹の病と薬の与え方)

一鷹の病と云に三ツ有。第一くさき餌を第二寝髪をもちすかす手をも洗すして餌を作りて飼第三鷹の心をしらす鷹の心に不合水も湯も不飼又ハ水を以あひせすして鷹を如在にすれハ必病付也。

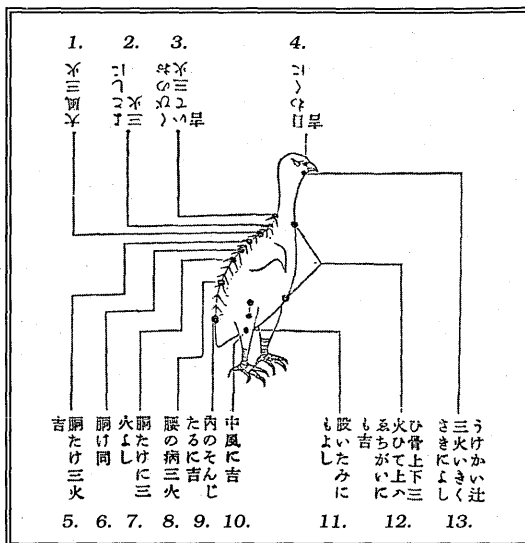
④ (鷹の病と薬の与え方)

一、鷹が病気になるには三つの原因がある。第一は腐った臭い餌をやる。第二には寝起きには髪も櫛かず手も洗わずに餌を作る、第三に鷹の心を理解しないで、鷹の欲しがっている時に合わせた水やり湯やりをしない、又は水浴びをさせない。鷹をこのように扱えば、必ず病が付くものである。

- ⑤つか(遣) へれぬ鷹 鷹狩りを嫌がつて使えない鷹。
- ⑥一赤萩根… ヒトツ アカハギノネ 以下、箇条書きで鷹に使う治療の材料があがっている。これらは小鳥の肉などに包んで与えた。
- ⑦いろこ(頭垢) ふけ。次注⑧の「首の垢」と共に、人間の体から出たものには霊力・薬効を感じていたものと思われる。
- ⑧おとかひ(頤)の下垢 人間の顎の下垢。

卷第五百四十八

荒井流鷹書



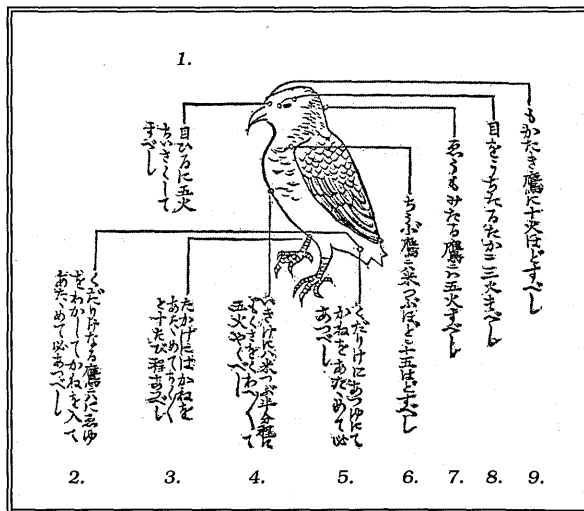
図Ⅲ

一極めてつかへれぬ鷹に飼葉。一赤萩根一鳥羽

一人の髪の毛いろこ一おとかひの下垢一夜鷹のまつ毛

是等当分に合て小豆粒程にして二丸飼へし。

千金不伝ノ秘方也。



図Ⅳ

三百二十一

図Ⅳは「養鷹秘抄」

(『續群書類従』卷第五百四十五) による。

一、一向に獲物を取る気にならない鷹に飼う薬。赤萩の根・鳥の羽・人の髪の毛のふけ・下あごの下垢・夜鷹のまつ毛。是れ等を当分に合わせて、小豆粒程にして二粒やるとよい。千金に価する他人には伝えられない秘密の処方である。

⑨ 鳥屋鷹^ニトヤダカ。換毛期が終つて鳥屋から出す鷹。普通は調教をして外界に慣れたところで獲物に向かわせる。モンゴルなどでは四十五日ほども時間をかけて体調を整えさせるといふ。ここでは、鳥屋出しをして六日目、即ち最も早く実獵の出来る鷹に仕上げたい時の方法を以下に述べている。

⑩ 鶏の赤女鳥の胸の骨^ニニワトリのアカメンドリのムネのホネ。鳥屋で飽食をしてきた鷹の胃腸を空にするために、骨を細かくして食べさせて吐かせる。ペレットをさせるための餌である。

⑪ このつら^ニいのこずち(牛膝)の誤写か。漢方では根を乾燥し、利尿・強精・通経薬として使用する。(刈米達夫・木村雄四郎共著『和漢薬用植物成分及薬効』(昭和三年刊)他)

⑫ 赤むハラ^ニアカムバラ。赤茨(蒺藜)。赤色のいばら。

⑬ かるかや(刈萱)イネ科の多年草。秋の七草の一。

⑭ 檀紙^ニダンシ。日本紙の一種。古くは檀(まゆみ)の繊維で作った。陸奥紙。

⑮ 屎の損したる^ニウチのソンジたる。便の水下しになった状態。灸所図Ⅲ9を参照。

⑯ 梨子を干かため^ニナシをホシかため。梨を「干し柿」状にしたため

⑨ 一鳥屋鷹を六日目に習^ニする事。鳥屋の内にて鶏^ニの

赤女鳥の胸の骨を細かにし水を多くしめして

飼。扱出して一日に水を三度程あひすへし。夕方

⑪ このつらの根を能々洗ひて烏の羽を煎して其汁に飼ひたして飼て湯を飼へし。

一鷹の屎^ヲすかす薬。一赤むハラ^ノの根^ヲかるかや^ノの根

煎して檀紙^ニにしめし遣ふへき朝五丸飼へし。

遣ハさる日ハ七丸飼へし。寿命長く諸病に能有。

一鷹の屎^ノの損したる薬。梨子^ヲを干かためておろし

小豆粒程にして三丸飼へし。又ハ藤を煎して其汁

一、鳥屋から出した鷹を六日目に狩らせるやり方。鳥屋の中で鶏の赤い女鳥の胸の骨を細かにし水を多く湿して飼い、さて鳥屋から出したら一日に水を三度浴びさせるとよい。夕方 イノコズチの根をよくよく洗って、烏の羽を煎じて其の汁に餌をひたして食べさせ湯を飼うとよい。

一、鷹の糞をひり出させる薬。赤茨の根・刈萱の根、これらを煎じて檀紙にしめし、鷹を遣うはずの朝五丸餌に入れて食べさせるとよい。遣わない日は七丸餌うとよい。鷹の寿命を長くし、諸病に効果がある。

一鷹の糞が水下しになった時の薬。梨を干しかためて摺り下し、小豆粒くらいにして、三丸飼うとよい。藤

の。漢方では鎮咳・解熱・利尿などに使用。(川中健雄・嶋野武共著『動物植物民間薬提要』(昭和十一年刊)他)

①⑦ 藤ノフジ マメ科の落葉樹。蔓は強靱で縄の代用。漢方で種子は緩下剤。(逸見誠三郎『薬用植物に親しむためのハンドブック』一九九〇年刊。以下『薬用植物ハンド』と略す)。
①⑧ ひて、浸して。ひたひたとして。「ひたして」の誤字か。原文98頁二行目を参照。

①⑨ 一葉ノイチヤク「シノフ沢ノ水也」は「ハ野中ノ溜ヲ水ノ事」又「麝香也」等と次項「灌頂の巻」にある。他に、「三葉」「四葉」「六葉」「七葉」が見える。

②⑩ 鹿角ノロツカク ⑦ 鹿の角 ④ 鹿角菜(ロツカクサイ。フノリ。)

②⑪ 鼠ノ左ノ股ノネズミノ ヒダリノ マタ 鷹は左に据えるため、鷹に於ては「左」が重要視される。同じ鼠でも「右」の股ではいけないのである。同様の事は二行後の「木兎の左の羽」にも見られる。「木兎の左の羽」にも見られる。②⑫ 髪ノ垢ノカミのアカ 注⑦参照。「いろこ」と対になる語か。

②⑬ 茯苓ノブクリヨウ 松を伐つて五、六年たつた土中の松根に生ずる無孢子類。利尿・水腫などの治療に使われる生薬。(『動物植物民間薬提要』他)

②⑭ 蓬ノ粉ノヨモギ ノ コ コ 蓬に挙げられた九種の動植物は、次行で述べられるように「皆粉にして」薬用に供されたのである。してみると「蓬ノ葉を乾燥して粉にしたもの」か、蓬の花穂など

を餌にひて、飼へし。

一鷹諸病一葉之事。一雨蓂ノ肝一鹿角一鼠ノ左ノ股

一野狐ノ肝一鯉ノ胃一髪ノ垢一茯苓一蓬ノ粉

一木兎ノ左ノ羽、皆粉にして夏ハ荒川の水、秋ハ草葉

の露、冬ハ湯をくぐみて吐出してほとはかして小豆

粒程にして二丸飼へ。通草の実を三ツ飼。唐土して

カク薬と言、日本ニイントウカク薬と言。

を煎じて其の汁を餌に浸して飼うとよい。

一、鷹のいろいろな病に効く薬の事。雨蛙の肝・鹿角・鼠の左の股・野狐の肝・鯉の胃・髪ノ垢・茯苓・蓬の粉・木兎の左の羽、皆粉にして、夏は急流の水、秋は草葉の露、冬は湯を、それぞれ口にくぐんで吐き出し、それで濡らしてふやかし小豆ほどの大きさの丸薬にして二丸食べさせよ。通草の実を三つ食べさせる。中国ではこれをカク薬と言、日本ではイントウカク薬と言。

「粉」と呼ばれる部分があつたのか疑問である。

②⑤ 木兎ノ左ノ羽ニミミズク

②⑥ 荒川の水 アラカワのミズ

荒々しい急流の水。淀んでい
ない清らかな水。

②⑦ ほと(潤)はかして「潤ばかす」は、水に物を浸して、膨れさせる。ふやかす。

②飼へゝカエ「飼へし」であろう。

八字下の「三ッ鯛」も「三ッ鯛へし」とあるべき所。「べし」が崩れている。この表記以下所々にある。原文99頁終りから二行目。

②⑨ 通草の実 アケビは生薬として

③〇 利尿・通經・惡瘡など種々の藥効が知られているが、木部・果実・莖葉が使われ、「実」は珍しい。
して「にて」の誤写か。原文終

りから一行目。

③① 蝉脱Ⅱセミガラ 蝉の脱けがら。

③② 丁子^ニチヨウジ 丁字。フトモ

モ科の熱帯常緑喬木。蕾を乾燥したもの丁香(クローブ)と呼び、古来有名な生薬・香辛料。

③③ 白銀Ⅱ シロガネ 白金。ぎん。

③⑤ 百会ニビヤクエ 頭頂。(放、六

③六 八四頁 頭のピクピクする部分。
三火焼へしⅡサンカヤクベ

し三回、火鉢などで火針（かしん）を熱くしておいて焼くとよい。

③⑦ おとりのほのくぼみ 「おとり

〔原文〕 98頁6行目から99頁5行目まで

一、雪の原の換へる業 梨子と丁助とあてわたり
少き粒程子とて三九個下又ハ後を賣してそれ
を腹小切そ何角

一膏一藥一事一雨一蠶一竹一席一角一氣一腹

一野狐、肝一狸、胃一蟹、垢一茯苓、一蓮ノ粉
一本麩ノ左、羽皆粉少クモ夏ハ荒川ノ水秋ハ茅葉
ノ夜冬ハ湯さくくみて吐出して下とをかくて煮
粉アヘビにして二丸サマ個（通草ノ実と三ツ個サマ煮て
カリ茶と云日暮、イントウカリ茶と云

一鷹の物に狂ふを治する薬。一蟬脱^{③①}一丁子^{③②}一白銀^{③③}

是等を等分にして水にてとき餌にまひりて飼へし。³⁴⁾

灸所に八百会(35)の頭(36)の上下を三火焼へし。又肩の上の

つきめ両方のおとりいのはのくほみ是を焼へし。

一人参一キンセン草、^⑤是を出して其汁餌にひて、飼

一、鷹の物に狂い暴れるのを治す薬。

蟬の脱げがら・丁字・白銀、是等を等分にして水で溶き餌に塗ぬして飼うとよい。物に狂う鷹に灸をする時の灸所としては、頭頂の百会の上下を三火焼くといふ。又、肩の上の縫ぬいき目、両方の頤の穂の窪み、是を焼くとよい。餌は人參・キンセン草、是を煎じ出して其の汁に浸して飼うのを

い「は」頤（おとがい）の誤写か。頤の下、の穂のように細くなった窪み。

③⑨ キンセン草 金盞花か。漢方では利尿・発汗・瀉下・通経薬。（『薬用植物ハンド』）

③⑨ 中骨ニナカボネ 背骨のことか。中みそニナカミゾ 骨と骨の間の溝。

④① 両方ニリヨウホウ 中骨の両側。骨の上に灸をすることは無いので両脇を焼くのである。

④② かき（垣）とを（通）し 疳取草。馬蹄草。蔓草で茎・葉を疳の薬・強壯薬とする。（松嶋種美著『実験薬用及食用植物總覧』（大正十年刊）他）

④③ せんなら せんなば（センナ葉）の誤写か。センナは常緑低木で、センナ葉は世界で広く使用される緩下剤。（『薬用植物ハンド』他）

④④ 洪田の水ニシブタのミズ 田の水あかの多い水「鷹に用ゐる薬水の一」放、六五七頁

④⑤ こゝる 意味不明。「す（寿）る」の誤写か。

④⑥ 下シを飼ヘシクダシをカウベシ 鷹はコクシユウム（原虫）が腸につくと死んでしまう。このような原因で弱っていく鷹に体力を落とさないよう気を配りながら、下剤をかけていくのである。

④⑦ すかし 腹をすかすもの。「参考「スカシ・グスリ 鷹の食欲をすゝむる薬」放 六五九頁」

第一なり。

一はらの病を治する薬ハ中骨を中みそにあて、

小指をそはたて、^{④①}両方を一火ツ、焼へし。薬にハかき

とをしを灰に焼てせんならの油洪田の水、鷹飼の

指の血、是等を可飼。此病ハつかふ時鳥といたく組て

病を其俣鳥屋に入たるかかくの如く也。鳥屋に入シと

こゝる時惣しての鷹に灸をすへし。此病の鷹ハ腹の

色青くむら／＼も有、能見へし。^{④⑤}下シを飼ヘシ。但すかし

斗を飼てハ鷹損するなり。

が第一である。

一、腹の病を治す薬には（鷹を伏せ衣で覆い）中骨の中溝に当てて小指をそば立てて、骨の両側を一火ずつ焼くとよい。薬にはかきとおしを灰に焼いて、せんな葉の油、洪田の水、鷹飼いの指の血、是等をたべさせるとよい。此の病は狩に遣う時、獲物の鳥とひどく組み合つて病を得、患つたものを其のまま鳥屋に入れたのがこの様になるのである。鳥屋に入れようとする時、そうした鷹にはすべて灸をするとよい。此の病の鷹は腹の色が青く群々とまだらになっている所もあり、よく見るべきである。下剤になるものを食べさせるとよい。但、腹をすかすものばかりを食べさせるとは鷹を駄目にしてしまう。

- ④⑧ 大色「大かせ」の誤写。大風は中風。「タイフウ」大風。鷹の病人間の中風に同じ。拳をしめ羽をあふり、時々ふるひわな、く。(放 六六三頁)。灸所、大風(図Ⅲ1)、中風(図Ⅰ12、13、図Ⅳ6)を参照
- ④⑨ 百草Ⅱヒヤクソウ「いろいろな薬草を混合して製した胃腸薬」(『広辞苑』)
- ⑤⑩ 赤金Ⅱアカガネ 銅。
- ⑤① 小豆Ⅱアズキ 天然痘。口もとに小豆大の腫瘍が出来る。「アツキ」鷹の病。倒になりすくむ貌(放 六二八頁)
- ⑤② 舟ワラ 水などを入れて飼う舟型の箱に敷いてある藁。水に浸けた藁。
- ⑤③ カラヒル 唐蒜。ニンニク。辛蒜。「薬となるは其の鱗莖で吐血。吐瀉等を治し、又血液を清潔にする。」(『實驗薬用及食用植物總覧』)
- ⑤④ ヲモタカ 沢濁。水田・池沢に自生するオモダカ科の多年草。(別説、放、六四〇頁には「澤濁、犬の脚の先端をいふ」とある。)
- ⑤⑤ 石灰Ⅱセツカイ 鷹小屋の消毒は現在でも石灰で行う。
- ⑤⑥ 紫草Ⅱムラサキグサ「根を紫根といひ解熱、解毒、腫瘍、凍傷、火傷薬。紫色の染料とする。」(『薬用植物ハンド』)
- ⑤⑦ ウハラ 茨。うばら。荆棘。
- ⑤⑧ 洪田ノ水に赤金をひてて 注④⑩参照。
- ⑤⑨ 三丸可飼Ⅱサンガン カウベシ丸薬にしたものを三粒食べさせるべきである。
- ⑥① 艾・蓬。よもぎ。

⑤⑧ 大色と言病ハ灸をして桑の木をたきて水をかけてむすへし。薬には百草を飼へし。桑の木の湯にて

⑤⑨ 赤金を出して三日に一度飼へし。

⑤① 小豆という云病には一舟ワラ一カラヒル一ヲモタカ一石灰一紫草の葉大キ成ウハラ是等分にして洪田ノ

水に赤金をひて、此水にて飼へし。又かきとをしの

苔の付たるを灰に焼て三丸可飼。又艾の根を土気

なく洗て粉にして飼へし。是ハ万病の薬也。七月七日

午ノ時蟬を取て陰干にして赤金をコツホノ水にてとき

可飼。又又川ニナヲ細かにして餌にくるみて飼へ。後に

水を飼へし。灸所ハ灌頂のかまへて焼へし。焼て

後の薬ハ沈をこそけて白銀を合て可飼。又朽たる

梨子を刻て小豆程にして三丸飼へし。又からひるを

一、大風と言う病は灸をして、桑の木を焚いて水をかけて蒸すといひ。薬には百草を食べさせるようにする。桑の木で焚いた湯で赤金を煎じ出して三日に一度与えるのもよい。

一、小豆と言う病には、舟藁・カラヒル・オモダカ・石灰・紫草の葉・大きな茨、是を等分にして、洪田の水に赤金を浸して、此の水で飼うようにする。又かきとおしの苔の付いたものを灰に焼いて丸め三個たべさせる。

又、ヨモギの根を土気なく洗て粉にして飼うといひ。是は万病の薬である。七月七日の昼時に蟬を取て陰干にして、銅を小壺の水で溶いて食べさせる。又又、川蟻を細かにして餌にくるんで食べさせよ。後に水を与えるといひ。灸所は灌頂の巻に記載がある。しっかりと焼くべきである。焼いて後の薬は、沈香を細かく削つて、白金を合わせて飼う。又よく熟れ朽ちた梨を刻んで小豆ほどの大きさにして三つ食べさせるとよ

- ⑥1 コツホノ水 小壺の水。「鷹の薬」木の洞にたまりたる水。(秘)一説 葭の枯葉にたまる水。」(放、六五一、六五二頁) 次項「灌頂の巻」には「朽木ノ節穴木ノ俣ニ有水也又人跡ノ水ナリ」とある。
- ⑥2 川ニナ 川蜷。民間薬として淋疾・黄疸の治療に使われた。(『動物植物民間薬提要』他)
- ⑥3 灌頂の巻 「灌頂の巻」の誤写。以後しばしば混同が見られる。
- ⑥4 沈ニヂン 沈香。常緑高木で香料を得る。
- ⑥5 こそけてニコソゲテ 細かく削つて。

- ⑥6 下リニクダリ 鷹の病。クダリケ(下気)は「水交りの種を吐くこと」(放 六四七頁、クダリケクスリ(下気薬)は「人參、芥の殻、勝架を粉にしたるもの等」(放 六四七頁)とある。灸所図I11及び、図IV2、5を参照。
- ⑥7 こつほの水 注⑥参照。「こつほの水とは榎梨子木あんじゅの木のくほにたまりたる水也」(『讀群書類従巻第五百四十八所収「荒井流鷹書」「水の異名の事」』)
- ⑥8 石上国の水ニイシウエ クニのミズ 鷹の薬。「石上にたまりたる雨水」(放 六三〇頁)

- ⑥9 まん病ちけん 雀の持っているトリコモナスによつて起る病。体力の無い若鳥など、弱った鷹に出る。物が飲みこめなかつたり、息が吸えなくなつたりする。

刻て餌に包て可飼。加様に十日の内にて治する也。

一ノ骨を焼 灌頂の巻有

⑦① 下りと云病。一こつほの水に一鮒一赤金を合て飼へし。

病名 灌頂の巻有 又灸所有。紙を丸めて夫ニ火を付て焼へし。

⑦② 又石上国の水を飼へし。石上国の水ハ鷹の命なり。此

水にて頭を洗なり。

⑦③ まん病ちけん云病の姿 灌頂の巻有 大海の九穴の蛇の

細腸兔の耳寐目是を合て餌にませて飼、目ににも

い。又、唐蒜を刻んで餌の肉に包んで飼うのもよい。この様になると、十日の内には治るものである。

一ノ骨を焼くことは灌頂の巻に記載が有る。

一、下りと言う腹の病には小壺の水に鮒・銅を合わせて食べさせるとよい。病名は灌頂の巻に記載されている。又灸所があつて、紙を丸めて、それに火を付けて焼くとよい。又、石上国の水という薬を与えたとよい。石上国の水は鷹の命である。此の水で鷹は頭を洗うのである。

一、万病チケンと言う病の姿は灌頂の巻にある。そういう時は大海の九穴の蛇の細腸と兔の耳・赤目を合わ

灸所、図IV4を参照。次の「灌頂の巻」には嚙をたらず様が見えて

⑦九穴の蛇の細腸Ⅱキユウケツのアワビのホソワタ「貝殻に九つの穴を持つ貝の腹わた」であるが、次の「灌頂の巻」に見える説明によると、その様な形をした植物の可能性もある。「大海ノ九穴蛇ノ細ハタトハ三月卅日ニ蒔タル麻ノ」で切れている。

⑦寐目 不明。字は「瘰目・赫目」とも見える形をしている。兎の赤い目であろうか。

⑦風Ⅱフウ「鷹の病。頭の毛おち耳の穴あらはになる徴候。」(放六八四頁)

⑦伏せて 伏布(フセギヌ)で動かないようにくるんで。

⑦力にて「刀にて」の誤写か。

⑦ひで 松材の脂のあるもの。やに(脂)。

⑦たけ 茸。「鷹の病。口をあけてすだく」(放六六五頁)涙腺の腫瘍。

⑦なまとし 生柄。

⑦屎茸Ⅱクソタケ「屎」は卑しめ、のしる接頭辞。茸に同じ。灸所、図I11を参照。

⑦ま西りて「西」の字「ひ」の誤写か。「餌にまひりて飼」の句、このあたりに多い。

⑧大いぬ「大きく肥えた犬」の意

ぬれ。九穴の貝ノ事
灌頂の巻ニ有

一風と云病の事。伏せてぬる湯にて洗、とちの木を力ニ

て削てこそけ洗ひ流すへし。其後ひでにかた塩を合

て付へし。又小豆を煮出し、其汁を餌にまひりて飼へ。

早く治する也。

一たけといふ病。烏の羽を灰に焼てなまとしをこそけテ

合て目に入れて上を絹にて結て三日あつてとくへし。

但餌を飼時ハとくへし。灸所有。薬にハあか水ニ餌を

ひたして飼へ。屎茸の薬、十一月に成てむはらの

せて餌にまぜて飼い、目にも塗りなさい。九穴の貝の事は、灌頂の巻に記載されて有る。

一、風と言う頭の毛の落ちる病の事であるが、鷹がこの病に患つた時は伏布にくるんで、ぬるま湯で洗い、柘の木を刃物で削いで作つた篋で患部をこそけ、洗い流すといふ。其の後、松の脂に堅塩を合わせて患部に塗付する。又小豆を煮出して、その汁を餌に混ぜて飼え。そうすれば早く治る。

一、茸という病には、烏の羽を灰に焼き、生の柘を削げたものと合わせて目に入れ、上を絹で包帯をし、三日してから解くといふ。但し、餌をやる時は解く。この病に有効な灸所がある。飲み薬としては洪田の水のようなかき水に餌を浸して飼え。ま

か。漢方では、黒焼にし、頭・肝・膽・囊などを神経痛・毛生薬・脱肛・胃腸に用いる。(動物植物民間薬提要)
 ⑧1 かつ塩。堅塩。塩のかたまり。消毒用か。

⑧2 目わく。眼疾。「目の前腫」(「荒井流鷹書」所収「目わくと云病の事」)。メワク・ウチクスリ。眼病を生じたるとき内服の薬。薑蔞・丁子、沈香何も等分煎じて與ふ。(放 六九四頁) 灸所図18、III 4を参照。

⑧3 烏の羽。カラスのハネ。以下、茸の治療に同じである。烏は婦人病の薬として全身を黒焼きにして使う(「動物植物民間薬提要」・「本朝食鑑」が鷹の場合は羽・血などが使われる。

⑧4 は「て」の誤写か。
 ⑧5 庭柳。ニワヤナギ。煎じて、驅虫・悪瘡の痒み等に用いるのは漢方と同じである。

⑧6 ゆ(茹)てよ。茹でよ。(こ)は「温湿布をせよ」の意。

⑧7 よこし。コシ。「鷹の足病。桑の木、朴の木、蔦を煎じ、赤子の尿及髪を剃屑を少し入れて與ふ」(放 六九九頁)、本文とはほぼ同じ。灸所、図III 2を参照。

⑧8 蔦柴。ツタシバ。蔦。「柴」は山野に生ずる小さい雑木の称で、

実を取て餌にま西りて飼へし。又麻の油大いぬの油を取て合て火にてあふりゆるくして餌にまひりて餌へ。かつ塩を豆程にして一ッ飼。

⑧9 一目わくと云病。朝水を目に吹へし。扱烏の羽を灰に焼て生とちをこそけて合て目に入は上を結ふさけ三日の間か様にすへし。又庭柳を煎し竹葉の水に合て目をめてよ。

⑧10 一よこしと云病。薬にハ一桑ノ木一朴ノ木一蔦柴を煎して赤子の尿を入、髪のはりくつを少添て飼へし。湯柳の皮を能あふりて足を巻へし。灸所有。

た十一月になったら、茨の実を取っておき、餌にまぜて飼うとよい。又麻の油、肥った犬の油を取って合せて火にあぶりゆるくして、餌にまぜて飼え。堅塩を豆粒くらいの大きさにして一つ与えよ。

一、目わくという病は、朝、水を目に吹きかけるとよい。さて、烏の羽を灰に焼いて、生の柝を削げたものと合わせ、鷹の目に入れる。その上を結いふさぎ三日間そのままにしておくとよい。又、庭柳を煎じて竹の葉の水に合せて目を温湿布せよ。

一、よこしと言う足の病。薬には桑の木・朴の木・蔦柴を煎じて赤子の尿を入れ、髪を剃り屑を少し添えて飼うとよい。ネコヤナギの皮をよく火にあぶって足を巻くとよい。灸所

ここでは接尾辞的に使われている。
 89 はりくつ 「は」は「そ」の誤写。
 90 湯柳ユヤナギ ネコヤナギの異名。

91 さけり 「たけり」の誤写か。タケリ・サゲ・ゲスリ「犀角末と水銀を合せ、餌に包みて與ふ。」(放六六五頁)。タケル「鷹の罫のうちにて卵をうむこと。」(放六六五頁)。

92 舌を出す事 トリコモナス原虫などに冒されると、腫れて、むずがゆかったり、痛んだりして舌を出す。

93 鵜 栄養価が高いため、体力をつけるために鵜を食べさせる。

94 ひる(蛭)むしろ(蓆)「ヒルムシロ科の水生多年草。山地の流れや池沼に自生。ヒルモ。サジナ」(広辞苑)

95 ゆわう(硫黄) いおう。皮膚病に卓効。

96 ふす(燻)べ 「燻ぶ」は「燃して煙を立たせる。けむらす。いぶす。」(広辞苑)

97 蚯蚓ミミズ ここでは線虫類、寄生虫のことを指している。回虫・蟯虫・十二指腸虫。
 98 ぬく血 採ったばかりの温かい血。

一 さけりと病。灸所有。かまへてく焼へし。薬に有。

一 赤金一こつほの水一ふなわらを合て七日飼へし。

一 舌を出す事。鵜を三日餌に飼。又ひるむしろ又ゆわう

にてふすへ常に赤金飼へし。

一 蚯蚓を尿につく事有。烏のぬく血をあたくかに

三日か間餌に飼へ。川ノひるをも飼へ。庭柳を煎して

が有る。

一 たけりと言う病。灸所有。かまへてく焼へし。薬に有。じつくり構えて焼くべきである。薬にも効くものがある。銅・小壺の水・舟薬を合せて七日飼うとよい。

一、トリコモナスなどに依り口内炎になると舌を出すことがある。こういう時は鵜など栄養価の高い餌を三日間くらい飼うとよい。蛭蓆や硫黄でいぶし、常に銅を餌に入れて与えるとよい。

一、蚯蚓状の寄生虫が尿につく事がある。そういう時は烏の採ったばかりの温かい血を温かいうちに三日間

⑨⑨ ひる(蛭)も(藻) 蛭席の別名。注
 ⑨⑩ 庭柳を煎して……餌を洗飼へ
 餌に飼う肉の中に隠れている寄
 生虫を駆除するのである。
 ⑩⑩ 蟹Ⅱカニ 沢蟹。

⑩⑪ こふⅡコブ 瘤。ポックス。根
 のある出来物。体力のある時は
 出ないが、調教中の若鷹に出る
 ことが多い。

⑩⑫ 火しん(針) 「鐵製、長さ五六
 寸、直径一分位、先端五分位を
 直角に曲げ、豫め火中にて焼き、
 爪嘴をなしたる時、血吹き出で
 し場合、之れを其の個所に當
 て、血を止むるなり。」(放 三七
 ○頁)

⑩⑬ も、け ももげ(肫・鳥臍)。鳥
 の五臓。ももき。むむき。もむ
 き。(広辞苑)
 ⑩⑭ 火鑊Ⅱヒガネ 「鑊」は「鐵」の異
 体字。「火鑊を当てよ」とは 鑊
 (こて)療治の一種か。

⑩⑮ 足の腫るⅡアシのハルる 趾屈
 病。
 ⑩⑯ 膝されたる 「すね(脛・脛)は」
 膝から踝に至る下肢の一部。「さ
 れる(曝る)」は日光や雨風など
 にさらされて朽ちること。脛の
 白骨化したもの。

⑩⑰ 火であた、(温)めよ 鑊で温め
 よ。注⑩参照。
 ⑩⑱ 刀ミて かみて。歯でかんで唾
 と合わせて。股いたみについて
 は灸所、図ⅢⅡを参照。

⑩⑲ 辛螺から 田螺の殻。
 ⑩⑳ そくひⅡソクイ 読飯。飯粒を
 つぶし練った糊。

其汁にて餌を洗飼へ。谷にある蟹を飼へし。

①① こふと言病。目ノ前に出んをは上を割て赤金の

火しんにて焼へし。口の根おとかひならは割て押ハ

鳥のも、けの様成物出る也。其上にそと火鑊を

当よ。又足の腫るを治する薬にハ一ねこの膝され

たるをこそけて酢にて付よ。其上を少火であた、

めよ。扱又股にハかた塩を刀ミてぬれ。又辛螺からを

粉にしてそくひに合て付よ。又かきとをシをかつほ

草是二三五をすりてかた塩を添て辛螺のからの

灰をこらに合て能酢にて付よ。又地含石を能酢

にて合て付よ。又百合の根を洗ておろして塩

を少合て付へし。其上を紙にてまくへし。

餌に飼へ。川に生える蛭藻も食べさせよ。庭柳を煎じて、その汁で餌を洗って飼え。谷の沢蟹も餌に良い。

一、瘤と言病。瘤が目の前に出たような場合は上を割って銅の火針で焼くといふ。口の根もとや顔に出たならば割って押せば、鳥の内蔵のよくな出来物の根が出るものである。其の上に、そつと火鑊を当てよ。又、足の腫れるのを治す薬には、猫の膝の白骨化したものをこそけて酢に溶いて患部に付けよ。其の上を少し火で温めよ。さて又、股には堅塩を噛んでつばきと合わせ塗り。又、田螺の殻を粉にして飯粒の糊に合せて付けよ。又、かきとおしをかつほ草と是を二対五の割合に混ぜて攪り、堅塩を添えて、田螺の殻の灰をこれらに合せて、よく酢で浸めして付けよ。又、地含石をよく酢で合わせて付けよ。又、百合の根を洗って攪り下して塩を少し合せて付けよ。其の上を紙で巻くといふ。

- ⑫ かきとをシ 注⑫参照。疳取草。積雪草。
- ⑬ かつほ草 弟切草(小連翹)の異名。止血剤とする。(『薬用植物ハンド』他)
- ⑭ 二五をすりて 「二五」は分量。ここでは疳取草二と弟切草五の割合で摺り合わせる意。
- ⑮ 不明。「こう」とすれば、「沈香・鉾膏」などが考えられる。「こうら」とすれば、「甲羅・赤螺」などが考えられる。れの脱字で「これら」とするのが最も妥当か。
- ⑯ 地含石Ⅱジガンセキ 鰐岩石。蛋白石。
- ⑰ 百合Ⅱユリ ユリ科ユリ属の多年草。鱗茎(百合根)は食用。
- ⑱ 羽かき鷹Ⅱハ ガキ ダカ 羽掻き鷹。痒いので、羽を打ったり、嘴で自分の羽をしごいたりする鷹。皮膚病にかかった鷹。「羽掻」は「左羽を打さ右の羽を打つ」(放 六七八頁) 灸所、図 I 9を参照。
- ㉑ つきめ 着き目。ここでは鷹の痒がっている部分。羽の根元の皮膚。
- ㉒ 蓬Ⅱヨモギ ここは蓬の葉を乾燥させて作った灸治療用の艾(もぐさ)である。
- ㉓ 表裏を 表裏両面から羽の着け根を。
- ㉔ 荏Ⅱエゴマ 荏胡麻。シソ科の一年草。果実を炒って胡麻に代用し、油も採る。
- ㉕ 青目成石Ⅱアオメ ナル イシ アスファルト。焼くとコールドタルを抽出するような石炭成分を含有する光沢のある黒い石。円錐形にして焼いて患部に当て

一 羽かき鷹にハ其かきたる羽のつきめの小羽を抜て
 赤金の針を少立て血を出すへし。扱蓬にて表裏を
 焼へし。又荏の油を紙にて付よ。青目成石を焼て
 一そくい一車前草をかけて度々蒸へし。

一、皮膚病にかかって痒がり羽掻きをする鷹には、その痒がる羽の根元の小羽を抜いて地肌が見えるようにし、そこへ銅の針を少し立てて血を出すといふ。さて次に蓬の艾で、痒がる羽の根元を羽の両面から焼くといふ。又、荏の油を紙で付けよ。焼くとコールドタルの性分が出る黒い石を焼いて、飯粒を練った糊と車前草を焼け石にかけて包むようにして、度々、患部を蒸すといふ。

る。ラクダの疥癬の治療にもアラブでは使う。

②④ そくい 続飯。「そくひ」に同じ。注⑩参照。

②⑤ 車前草Ⅱオオバコ 蛙葉。「生葉を焙つて腫物に貼付すると吸出の効」〔実験薬用及食用植物總覽〕他)

②⑥ 虱の葉「烏扇の根と白粉とを粉末とし酢にてゆるくのべ、羽の根にさす。」(放 六五八頁)

②⑦ にか(苦)木Ⅱニガキ「枝および葉に苦味があり、樹液を駆虫・健胃薬に供する」〔広辞苑〕

②⑧ しらい物 米ぬか。米のとぎ汁。

②⑨ ここでは煎じ出した汁にとろ味を付け、しかもビタミンB1を添付することになる。

②⑩ 洗へしⅡアラウ ベシ 鷹の羽を洗うとよい。「洗う」とは実質的には、「薬を塗布する」ことになる。

②⑪ はこつく 不明。「はこべら」か。②⑫ 夜取柳Ⅱヨルトルヤナギ「鷹の葉水。」(放 七〇〇頁)とあり、次項「灌頂巻」には「夜ルトル柳ト榆柳ノ事」とある。

②⑬ 釜の下土Ⅱカマのシタのツチ 火熱消毒のされた無菌の土である。これを付けて、傷にふたをするのである。

②⑭ そらとり 空取りは「鷹の空にて鳥をとるをいふ。」(放 六六三頁)

②⑮ 藤の末 藤の葉末。

②⑯ 蟬Ⅱセミ 注③参照。民間薬と

一虱の葉にはにか木の葉をけつりて煎してしらい

物を入れて洗へし。

一犬に損させられたるにハ一車前草一はこつく一夜

取柳是等を以洗て見よ。若疵なとあらは犬の毛

を灰ニして釜の下土を細かにして付へし。

一そらとりして身うちたるには一藤の末を煎して

洗へし。蟬を細かにして策水にしても餌にひたしても

一、羽根に虱がわいた時の葉には、苦木の葉を削つて煎じて、そこへ米ぬかを入れて、それで鷹の羽を洗うとよい。

一、犬に怪我等させられた時には、車前草・はこつく・夜取柳、是等の汁で患部を洗つてみよ。もし、疵などがあれば、犬の毛を灰にして、釜の下土を細かにして付けるとよい。

一、空で鳥を取り、一緒に落ちて打撲した鷹には、藤の葉を煎じた汁で洗うとよい。蟬殻を細かにして煎じ

しては蟬殻を煎じたり粉末にして用いる。こゝも「策水」「ひたす」の語があり、煎じた汁を用いたのだろう。

⑬ 策水Ⅱブチミズ 刷毛(筆)に含ませた水。策(ブチ)は「山藤の蔓、長さ約三尺、先端を叩き房の如くにし、元の方を失らず。」(放 三七二頁)羽を整えたりする時のブラシである。「タカ・ナブリ」(放 六六四頁)とも。ここでは打撲の時、薬を奥までつけるために策を使っている。鷹匠は羽織の「策穴(ブチアナ)」に策をさして常に持ち歩く。

⑭ 釜の下の土 注⑩参照。ここでは蟬の代りに、この土を餌に包み食べさせてもよいとしている。

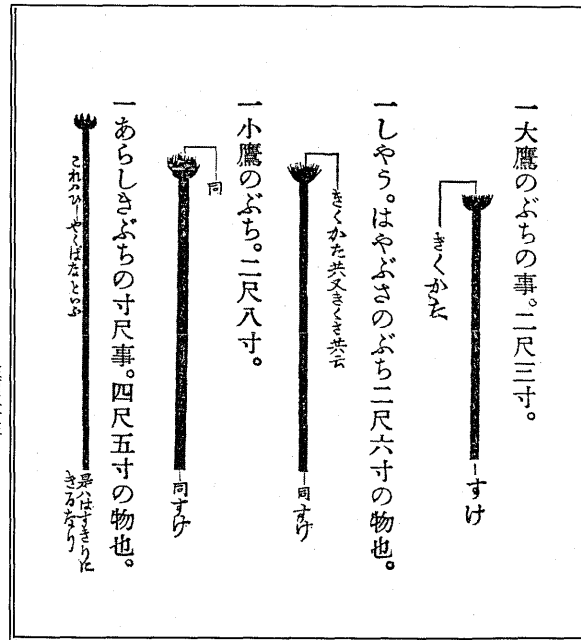
⑮ 頭を突たるには 木などにぶつかって、頭を突いてしまった鷹には。

⑯ 檀紙Ⅱダンシ 和紙。

⑰ 血の付たるは吉 外へ出血しているのは、内出血して脳を圧迫してしまっているのよりはまだ良いのである。

又ハ釜⑱の下の土をも飼へし。

図 V



一頭を突きたるには檀紙⑯を和らかにしてもみてこより

にして鼻に入る。引出して見るに血⑰の付たるハ吉、つか

さるハわろし。かしら突たるハ鼻の息をうちへ引

て頭をふるなり。

た水を策で塗ってもよいし、餌に浸して食べさせてもよい。又は釜の下⑱の土を餌につけて食べさせてもよい。

扱かう鷹の違いにより、策(ブチ)も相違する。「養鷹秘抄」(『續群書類従』巻第五百四十五)より。

一、頭を木などに打ち突けてしまった鷹には、和紙を柔らかにもんで、こよりにして鼻の中へ入れてみる。引き出して見た時に血の付いているのは良いが、血のついて来ないのは悪い。嘴から頭を突つこんでしまった鷹は、鼻の息を内へ引いて頭を振るものである。

④① 身より物の生出る事。イボ。出来もの。榮養が悪いと出る。
 ④② 盈て 不明。「はらめて」か。「盈」は「みちる・あふれる・あまる」

④③ 口をすゝきて 鷹匠は口を漱いで清潔にして、雑菌を吹き込まないように。

④④ 晝身にも吹くべし。自然の水浴びをするのが朝。その頃の合わせて水を吹きかけてやるのである。

④⑤ 急に「キユウに 早く。早急に。灸所、図17、8を参照。

「鼻氣。煙る所に鷹をつなぎ置けば鼻つまりて水など出る病氣。」(放 六八〇頁)「鼻氣内葉。鼻のつまるを治す薬。楊梅皮、丁子、桂心、蟬蛻を粉にして用いる。その他にも種々の處方あり。」(放 六八〇頁)とあり、息がつかまる故、急を要するのである。

④⑥ 下り氣「クダリケ 餌が悪いと下す。水っぽい糞になり、色も白くなる。ちなみに、普通便の色は白に黒、便秘の時の色は白に青である。

④⑦ 雉の爪「キジのツメ 爪は「蹴爪距(けづめ)」である。「キジ・ニワトリなどの脚のやや上部に

一 鷹の身より物の生出る事あらハ頭をさけて常に

振ふ也。灸所有。尻より生るは尾を能盈て毛を

ひろけて常に尾をはぬる。是を以病をしるへし。

氣を付て見へし。

一 鷹の鼻のふさかりたるには紙よりをして胡麻の

油をぬり鼻の穴へ入させは油とをる也。扱油をとふして

口をすゝきて水を鼻にふくへし。晝身にも吹へし。

灸所あり急にすへし。

一 下り氣を治するにハ雉の爪、同左の膝の節を刻て

鳥の肉をひて、其汁を共に飼へし。又米の汁

を銅のひさけに入れてぬるめて餌を侵テ飼へし。

一、鷹の体から出来ものが出る事があると、鷹は頭を下げて常に振るうものである。こういう時に灸をするとかく所がある。尻から出来ものが出来来る時は尾をよく膨ませて毛を拡げ、常に尾をはね上げる。是を見て病を知るべきである。氣をつけて見るとよい。

一、鷹の鼻の塞つたのには、紙でこよりを作つて、それに胡麻の油をぬり、鼻の穴へ、押し入れれば油が鼻を通る。さて、油を通したところで、鷹匠は口を漱いでから水を含み、鷹の鼻に吹きかけるとよい。朝方には、鼻だけでなく体にも吹きかけるとよい。鼻を通す灸所がある。早く処置をするべきである。

一、食当りなどで便が水っぽくなつて吐く時には、雉の蹴爪や雉の左の膝の関節を刻んで煎じ、鳥の肉を浸して、其の汁と一緒に餌として与えらるとよい。又、米の汁を銅の銚子に

後向きに生えた鋭い突起。表皮の角質化したもので闘争用の武器」(『広辞苑』)

④左の膝の節ヒダリのスネのフシ放鷹の仲間では左を重んじる(注②参照)ため「左の膝の節」であるが、要するに関節の軟骨を刻んで食べさせて、意図的に悪い食べ物を吐き出させるのである。

④ひて、浸して。次の行の「侵テ」も同じ。

⑤ひさけヒサゲ 提。提子。銚子の一種で小鍋形のもの。

⑤わらたワラダ 薬座。わろうだ。下り気の鷹の回りが湿めっぽくなるのを防ぐのである。灸所については、注⑥を参照。

⑤魚の目ウオのメ 表皮の角質層の一部が肥厚増殖して真皮内に深く入り込んだもの。足の裏などに生ずる。

⑤唐桃カラモモ アンズの名。

⑤黄柏オオバク 黄蘗。キハダの別称。その樹皮の生薬名。健胃・消炎剤のほか、染料にも用いる。

⑤血たる(垂) 共不苦ニチ タルトモクルシカラズ 血が流れてもかまわない。

⑤鹿角ロツカク 注②参照。民間薬としては黒焼き粉末として、又水に出し酢を加えるなどして、石灰分を薬用とする。

⑤天南星テンナンショウ「サトイモ科テンナンショウ属植物の総称。マムシグサ・ウラシマソウ・ミミガタテンナンショウ等。生

其後わらたの上に繋て置へし。

一足に魚の目出たるは唐桃の実に生鮓を摺合

絹に包て魚の目に塗へし。又蛇骨を細末して能

酢にて付よ。又黄柏を煎して静に洗。必拔ル。早稲わ

らを灰にして付よ。血たる共不苦一鹿角一黄柏粉

一天南星いづれも細末にして付へし。

入れて温め、餌を浸して飼うとよい。其の後薬座の上に繋いで置くと鷹が湿めらなくてよい。

一、鷹の足に魚の目が出た時は、アンズの実に生鮓を摺り合わせ、その摺り身を絹に包んで魚の目の部分に塗るとよい。又、蛇の骨を細末にして、よく酢で練って付けよ。又、キハダを煎じて、その汁で患部を静かに洗え。そうすれば必ず魚の目は抜ける。抜けた所へは早稲薬を灰にして付けよ。血が垂れてもかまわない。鹿角・黄柏・天南星をいづれも細かい粉末にして付けるとよい。

薬は根茎を輪切りにして干した
もの。漢方で去痰・鎮痙薬。〔「広
辞苑」〕他に「はれ物・肩こり」
〔「薬用植物ハンド」〕

⑧ 目茸 Ⅱメタケ 次項「灌頂の巻」

には、「目ヲ閉キ肩ニアテ、摺ナ
リ顔ヲケルヤウニスル」とある。
目乞食、目の前の出来物である。
豆のように出来る。ポックス。
弱ると出るので体力をつけて治
す。「目わく」に同じ。〔参考、

「メワク・ウチクスリ 目疾を生
じたるとき内服の薬、薰陸、丁
子、沈香何も等分煎じて與ふ。」
〔放 六九四頁〕

⑨ 丁子 Ⅱチヨウジ 丁字。〔ジャワ、

西インド諸島などで栽培、葉は
革質で光沢あり、花は紅色、つ
ぼみは緑。丁字はつぼみの乾し
たもので消化促進、驅風薬。香
辛料として有名〕〔「薬用植物ハン
ド」〕注⑩参照。

⑩ 丁香 Ⅱジャコウ 麝香。〔ジャコ
ウジカの麝香囊から製した香料。
薬料としても使われる。〕〔「広辞
苑」〕

⑪ 灸所 Ⅱキユウシヨ アリ 目

茸の灸所は注⑧に続く「灌頂の巻」
には「目ノ前背の毛際ヲ合テ両方
ヲ焼ヘシ」とある。注⑩を参照。
⑫ 第一吉 不明。脱字：脱文有るか。
「最も良い」の義か。

一 目茸と言病。一 丁子 Ⅱ 丁香を出し餌に侵て飼へ。

灸所有。第一吉。



図VI 眠鷹の図

床上には小道具類が広げられ、火針も見える。『絵本鷹か
がみ』（暁斎記念館 昭和六十年復刻）9頁より。

一、目茸と言う病。丁字・麝香を煮
出し、その汁を餌に浸して食べさせ
よ。灸所がある。第一がよい。

⑬ 屎つまりふさかりたる 次項「灌頂の巻」に「屎ツマリ尻ノフサカリタル事アリ是ハ尾ヲサシテ鵠ノ如ク尾ヲタ、ク腰ヲモフル也」とある。「糞つまり」である。注⑮も参照。

⑭ しほくすりて 塩を摺りて。原本は「しほ、すりて」であつたと思われる。

⑮ 犀角ハサイカク 犀の角。漢方では犀の角の先端を粉末にし解熱剤とする。

⑯ 人のあましたる鷹 調教しきれず、鷹匠のもてあました鷹。

⑰ 馬の夜目 馬の趾の五つ目に当る肢(飛節)の内側にある爪跡。指の痕跡。馬の夜目はカルシウムであり、気分の落ち着かない鷹に与える。

⑱ 鼻に蛭の入たる 蛭は皮膚の柔らかい部分に吸いついて血を吸う。鷹の鼻に入れば息がしにくく、口をわずかにあける。「蛭」は血を吸う虫の総称、ここは、米粒ほどのダニ。

⑲ かたはみ カタバミ科の多年草。別名サクシヨウソウ(酢漿草)、スイモツグサ。「茎葉のしほり汁を皮膚にぬり、寄生性の皮膚病に用いる。」(『薬用植物ハンドブック』、疥癬の薬)。

⑳ 鷹を伏せさかさまに持て 鷹を伏せ衣でくるんで逆さまに持つのである。

㉑ 頓てイヤガて すぐに。

一 屎つまりふさかりたるを治するにハ紙よりをして

胡麻の油をぬりて指入よ。又しほくすりて付よ。又

犀角をこそけて豆程餌にくるみて飼へ。

一人のあましたる鷹にハ馬の夜目を粉にして飼。秘事也。

一 鼻に蛭の入たるにハかたはみをもみ出して鼻に入よ。

鷹を伏せさかさまに持てしはしあれハ頓て出る也。

一、屎がつまって尻の塞がったのを治すには、紙でこよりを作つて、それに胡麻の油を塗つて尻の穴へ指し入れよ。又、塩を摺つて尻に付けよ。又、犀の角をこそけて豆程、餌にくるんで与えよ。

一、鷹匠が調教し切れずに、もてあました鷹には、馬の後趾の指の痕跡である夜目を粉にして与える。これは秘伝になつてゐる事である。

一、鷹の鼻にダニが入つて食いついた時には、カタバミをもみ出して鼻に入れよ。そして鷹を伏せ衣で包んで逆さに持つてしばらくすれば、すぐにダニは出てくるものである。

⑫ かゆかりⅡカユガリ 痒がり。蚊・ダニ・虱などにたかられて痒がる。又、そこがかさぶたになることもある。

⑬ 尾羽をも洗ひⅡオバネをもアライ ダニは尾羽につく。

⑭ 酢を付よⅡスをツケよ 「参考、虱のついた時は酢で洗ってやる。」注⑩を参照。

⑮ 血尿Ⅱチグソ 血便。コクシジユウムがつくと血便が出る。早く肉をつけないと衰弱して死んでしまう。糞はしっかりと観察しないと鷹は飼えない。

⑯ 生鳥を提出しⅡイケドリをトリダシ 餌用に飼つてあつた活鳥を鷹の目の前に出し。

⑰ 鉛Ⅱナマリ 蛋白質に結合しやすい。モンゴルではガーゼに包んでマグネシウムを飲ませることもある。

⑱ 肉のかたまりたる 腫瘍。出来物。

⑲ 鳴Ⅱシギ 田嶋・山嶋など。水辺に住み、水棲の小動物を食す。「山鳥三羽より鳴一羽」と言う。貴重で美味い鳥である。

⑳ 五臓Ⅱゴゾウ 内臓。漢方で「肝・心・脾・肺・腎」の五内臓。

㉑ 刀Ⅱカタナ 小刀。「急刃、平刃の二種を用ふ、傘屋切り出しとも言ふ。爪嘴をなす時に用ふ。」(放 二七〇頁)

㉒ 荒血Ⅱアラチ 刀傷・腫物などの出血。

一 かゆかりの薬。先清き水にて洗、竹刀又ハ爪にて鷹ノ肌をこそけ血を出せ尾羽をも洗ひて能酢を付よ。

一 血尿をつくにハ生たる雉のあつき肉むらを飼へ。生

鳥を提出し鷹に取らせ能々くれて鷹を肥

すへし。一羽一人参一鉛少合て飼へし。生鳥ハ雉也。

一 鷹の肉のかたまりたるハ鳴の血を飼へし。遅く治すれハ

肉悪敷成のみならず五臓の煩と成也。急き治すへし。

扱肉のはれたるハ刀の先にて差割て荒血を出し薬

を入てそつと縫へし。巢鷹にハ此病付す。鵠と

赤毛の鷹にハ付なり。薬有。無名置もよし。

一、痒がりの薬。こういう時はまず、きれいな水で患部を洗い、竹刀、又は爪で鷹の肌をこそげ、血を出せ。尾羽をも洗って、能く酢を付けよ。

一、血便を出す鷹には、生きている雉の厚い肉を飼へ。生きている鳥を鷹の目の前に取り出し、鷹に狩猟をしている気分させるように促らえさせたり、(食欲の出る工夫をして)よくよく栄養のある餌を与えて、鷹を肥やすべきである。羽・人参・鉛を少し合わせて(肉に包んで)飼うとよい。与える活鳥は雉である。

一、腫物で鷹の筋肉が堅くなった時には鳴の血を飼うとよい。治療が遅れると肉の状態が悪くなるだけでなく、内臓の煩らいとなるものである。急いで治療すべきである。さて肉の腫れたのは小刀の先で差し割って、腫瘍の膿を出し、薬を入れてそつと縫うとよい。巢鷹には此の病が付く。鵠と赤毛の鷹には付くものである。

- ⑬ 巢鷹Ⅱスタカ 「子飼をいふ。巢より下して人家にて雛を飼立たるをいふ。」(放 六六一頁)
- ⑭ 鵠Ⅱツミ 悦哉(えつさい)。鵠鷹目の小型の鷹。
- ⑮ 無名Ⅱムミヨウ 無名餌。無名餌は「鷹の餌の一種」(放 六九三頁)
- ⑯ 脛の打くたけたるⅡスネのウチクダけたる ねんご。
- ⑰ 頭のみちの下左右に窪み アタマのみちのシタ サユウにクボみ ほんの窪
- ⑱ 脇の下五相の穴Ⅱワキのシタゴソウのアナ 脇は脇穴。「脇穴」は「鷹の灸所の名所。胴氣等の病に適す。」(放 七〇一頁)。「脇の下」には筋肉が一本来ている。(放 四二二頁) 図I5・10を、また、注②を参照。
- ⑲ 筵治 不明。葉草名か。
- ⑳ 唐腸 唐綿。トウワタ科の多年草。木綿綿と区別して唐腸と呼ぶ。種子には種髪を具える。(『広辞苑』他)
- ㉑ 龍骨Ⅱリュウコツ 鳥の胸の骨(軟骨)。
- ㉒ 目をつきたる 目を突いた鷹。驚などに目をつ、かれることがある。灸所、図IV8を参照。
- ㉓ 鶏の卵Ⅱニワトリのタマゴ 鶏の卵の殻。
- ㉔ 舞鷹Ⅱマイダカ 癩癩になった鷹。ふらふら鷹。頭を振り、目まいのため飛ばず、餌も食べられない。ニューカッスル病。雀の持っているウィルスを食べってしまうことにより発病。

- 一脛の打くたけたるにハ鷹の後頭Ⅱ頭のみちの下左右に窪みあり、二火つ、焼へし。腰を三火焼、脇の下五相の穴を三火焼也。一筵治一唐腸一龍骨等分にして豆程餌に包て口ニ入よ。頂を焼へし。
- ① 目をつきたるにハ鶏の卵をこそけ能酢に合三日が間目にさし入よ。
- ② 舞鷹にハ鶏の脇の小羽を灰に焼て餌にくるみて飼へし。

薬が有る。無名餌を置いておくのもよい。

一脛を打って捻挫になった時には、鷹の後頭部の左右にはほんの窪みがあるが、そこを火針で二火ずつ焼くとよい。また腰を三火焼き、脇の下五相の穴を三火焼くのである。内服薬としては筵治・唐綿・龍骨を等分にして、豆粒ほどの分量を餌に包んで口に入れよ。頭頂を焼くとよい。

一、目を突いた鷹には、鶏の卵の殻をこそけ、よく酢に合わせて、三日間目薬としてさせ。

一、癩癩になってふらふらしている鷹には、鶏の脇の小羽を焼いて、その灰を餌にくるんで食べさせるとよい。

- ⑨ 初児の尿^⑨ウイゴのクソ 新生児の便。「初児」は「初産の子」は「つこ」の意であるが、ここでは「生まれたばかりの子」の意かと思われる。出産二、三日のうちに排泄される赤子の便は、母体にある時に貯えられたもので、授乳が始まってからの赤子の便とは違つて特別視される。
- ⑩ 刈萱^⑩カルカヤ 注⑬に既出。葉の種子は健胃剤・利尿剤・咳止め。
- ⑪ 車前子^⑪オオバコ 車前草の種子
- ⑫ 馬頭骨^⑫バトウコツ 馬の頭の骨。

- ⑬ 鳥心^⑬トリゴコロ 鳥を狩つて食べたいという気持ち。
- ⑭ 地へ流れたる沢^⑭地下水となつて地下を流れた沢。
- ⑮ 鯀^⑮ドロンコ 鯀鯀(アンコウ)。ここでは淡水棲の川ハゼ。どこ。どれ。おこぜ。
- ⑯ 尾花^⑯オバナ すすき。

- ⑰ いろこ(鱗) 魚のうろこ。髪の毛。注⑦に既出。

- ⑱ 羽かき(搔)の薬、「羽搔薬。挂心・丁子、烏賊甲、胡椒を粉にして用ふ。」(放 六七八頁)。注⑩を参照。
- ⑲ こしら虫 不明。「うしら虫」か。

一鷹第一諸病に古葉。鳥の羽を煎して其湯に

餌を侵して飼へ。初児の尿を百日陰干^⑨シテ児の

爪を飼へし。又刈萱実一車前子一馬頭骨^⑫コッゲ

一塩一銅等分に合て飼へし。

一鳥を追^⑬鳥心なき鷹に飼へき薬にハ地^⑭へ流れ

たる沢の鯀^⑮陰干^⑮シテ山陰の尾花^⑯を等分に合て

餌にくるみ飼へし。

一極て荒き鷹にハ髪の毛のいろこを飼へ。疲鷹にハ不可飼。

一羽かきの薬には一こしら虫一古桶の輪を灰にして

唾^⑲にて虫を喰濡し今の灰を付て鳥の肉にくるみ

一、鷹の第一に諸病によく効く薬。鳥の羽を煎じて其の湯に餌を浸して飼え。新生児の便を百日陰干^⑨にして、子供の爪を一緒に与えろといひ。又、刈萱の実・オオバコの実・馬の頭の骨をこそげたもの・塩・銅を等分に合わせて飼うといひ。

一、鳥を追わず、鳥を狩つて食べようという気の無い鷹に与えろといひ薬には、地下水となつたことのある沢に棲む川ハゼを陰干^⑮にして、山陰のすすきを等分に合わせて、餌にくるんで与えろのがよい。

一、大変気の荒い鷹には、髪の毛のふけを与えよ。疲れて元気の無い鷹には与えてはいけない。

一、左羽を打ち右の羽を打つ鷹の薬には、こしら虫と古桶のたがを灰にしたものを用意し、唾で虫を喰い濡

「こうら虫」なら「紅螺虫」で「あかたにし」。

②⑧ 古桶の輪ハフルオケのワ 古桶にはめた竹を割つてたがねた輪（たが）。

②⑨ 五七三ハゴシチサン 分量の割合。最初に五、次に七、最後に三の割合で三回に分けて与えるのである。

②⑩ 霜ハソウ 葉の白い粉末。

②⑪ 耳ハミミクサ。耳草。不明。

「ユキノシタ」(漢名「虎耳草」)か。ユキノシタは凍傷・咳止めに有効。

②⑫ 沈香ハジンコウ ジンチョウウゲ科の喬木。香料木。

②⑬ しけしけハシゲシゲ 何度も。ちよくちよくと。

②⑭ 股気ハマタゲ 股の打撲か。灸所、股ぬけ図I 13、II 9、股いたみ、図III 11を参照。

②⑮ 薬師草ハヤクシソウ キク科の越年草。

②⑯ 五倍子ハゴバイシ ヌルデの葉茎にできる虫こぶ。ヌルデミミフシが寄生して生じるもので、

殼にタンニンを多量に含み、薬用に用いられるほか、染織やインキ製造に用いられる。(『小学館国語辞典』尚、「二五倍子」とあるべき「二」が脱字である。

②⑰ 地黄ハジオウ ゴマノハグサ科の多年草。根は補血・強壯薬。

②⑱ 沈ハジン 沈香の略。

②⑲ 猫の頭ハネコのアタマ 民間薬では黒焼きにして眼病に使う

て飼へし。五七三鷹に依て飼へし。又一あし毛馬の

爪霜一車前草の根霜一耳ハ一沈香霜是を

等分に合て餌にくるみて飼へし。聞き所に繋ぎ

しけく飼へし。

① 一股気の薬にハ一薬師草一車前子五倍子一地黄

一沈一耳ハいづれも黒焼にして等分に合可飼。

聞き所に繋へし。

① 一胸を突きたるに一猫ノ頭一鮎霜一白ヒ物一萱艸柚

し、それに灰を付けて、鳥の肉にくるんで与えたとよい。五・七・三の割合で三回に飼うのであるが、鷹の様子に依つて加減して飼うとよい。又、芦毛馬の爪の粉末、オオバコの根の粉末、耳草、沈香の粉末、是を等分に合わせて、餌にくるんで与えたとよい。聞き所に繋いで、しげしげと何度も与えたとよい。

一、股気の薬には、薬師草、オオバコの種子、五倍子、地黄、沈香、耳草をどれも黒焼にして等分に合わせて与える。聞き所に繋ぐとよい。

一、鷹が胸を突いた時には、猫の

〔動物植物民間薬提要〕。

②⑧ 鮒^② フナ コイ目の淡水魚。

②⑨ 白^② 物^② シロイモノ おしろい。

②⑩ 萱^② 艸^② カンゾウ 萱草。ユリ科の多年草。本来中国大陸の植物だが、その変種ヤブカンゾウ・ニッコウキスゲ・ユウスゲなどを総称して言う。

②⑪ 柚^② ノ実^② ユズノミ ミカン科の柚子の実。芳香健胃薬、柚子酢を作る。「柚ノ実」の「一」が脱字。

②⑫ リウコセニ^② リウコゼニ 竜虎銭。

②⑬ 土^② 竜^② モグラ 食虫目の獣。土中の虫を捕食する。

②⑭ 桶^② の輪^② オケのワ 籬（たが）。注②⑥参照。

②⑮ 胸^② 氣^② ドウケ 「鷹の病。物にふれておこる。」（放 六七〇頁）

灸所は肩、脇、胸、腰に（二三火）あり。図I 4・5、II 7・8、III 6を参照。

②⑯ リッス 不明。りす（栗鼠）のことか。

②⑰ ロツカク 鹿角。⑦鹿の角。①鹿角菜（海藻「ふのり」の漢名）。注②⑩に既出。

②⑱ 桂^② 心^② ケイシン ⑦桂、または肉桂の樹皮の外側の粗い皮を除いたもの。薬用・香味料・調味料とする。①植物「やぶにつけい」の異名。

②⑳ 田^② 洪^② タシブ 田の水あか。

実一^② リウコセニ^② 一^② 土^② 竜^② 一^② 桶^② ノ輪^② 何れも粉にして

餌^② ニ包^② ミ可^② 飼^②。是ノ秘方の薬也。

一^② 胸^② 氣^② の薬^② 一^② リッス^② 一^② ロツカク^② 一^② 桂^② 心^② 一^② 耳^② 中^② 一^② 柚^② 実^②

一^② 田^② 洪^② 粉^② にして田ノ洪^② にしめして餌^② にくるみて可^② 飼^②。

頭・鮒を乾燥させて砕いた粉末・おしろい・萱草・柚子の実・竜虎銭・土竜・桶の籬、どれも粉にして餌に包んで与えたとよい。胸を突いた時の秘方の薬である。

一、胸氣の薬。リッス・鹿角・桂心・耳草・柚子の実・田洪。是れ等を粉にして田の洪にしめして、餌にくるんで与えたとよい。

㉓ 尾羽留りたるを出す ㉓ オバネ
トドマリたるをダす 尾羽の生
長が止まった時、生長をうなが
す。

㉔ ナツメ(棗) クロウメモドキ科
の落葉小木、漢方では果実を解
毒強壯剤に用いる。

㉕ カラ(乾)サケ(鮭) 鮭の腸を
去り素乾にしたもの。

㉖ 蒼茸 ㉖ アオタケ 初茸(ハツタケ)
の異名。

㉗ 松ヒデ(秀) 松秀(マツホ)。松
の木の芯のやにの多いもの。

㉘ 槍上て ㉘ ツキアゲて (銅の針で)
突上げて。

㉙ 松ノ董 ㉙ ヒノキノトウ 「董」は
不明。鷹の道具は松で出来てい
る。松製の錐または篋のような
ものであるうか。

㉚ 羽くき ㉚ ハクキ 「翻又脩羽莖。」
(放 六七八頁)

㉛ 目の白き鷹 ㉛ シロキタカ

鷹の目は若い時は黄色である
が、次第にオレンジ色になり、
終には年を取ると赤色になる。
目が白いは黄色になる以前の
弱々しい状態である。白い目は
日光に当てると黄色になる。

㉜ 雨鳥屋 ㉜ アマドヤ 屋根の無い
鳥屋。竹の格子だけの一坪ほど
の小さい鷹小屋。

㉝ はしかくて折る事 もろくなつ
て折れる事。

㉞ 夜取柳 ㉞ ヨルトルヤナギ 注 ㉞
参照。檉柳。

㉟ 鳥の油 ㉟ トリのアブラ 鶏鴨な

一 尾羽留りたるを出す薬 一 ナツメ 一 カラサケノ皮ノ

身をコンケ 一 蒼茸ノ油 一 松ヒデ粉にして銅の

針にて槍上て松ノ董にて入よ。此薬を羽くきにぬり

てさすへし。

一 目の白き鷹を黄になす薬にハ雨鳥屋に放すへし。

一 鷹の尾羽はしかくて折る事ハ夜取柳鳥の油を

入煎してゆて

一、尾羽の生長が止まったり羽の出
が悪い時の薬。棗・乾鮭の身をこそ
ぎたもの、初茸の油・松秀を粉にし
て、銅の針で患部を指し突き上げて、
そこへ松の道具で薬を入れよ。此の
薬を羽茎に塗ってから針を指すとよ
い。

一、目の白い鷹を黄色にする薬には、
日光のよく入る雨鳥屋に放すとよ
い。

一、鷹の尾羽がバサバサともろくな
つて折れることがあるが、そのよう
な時は、檉柳を鳥の油を加えて煎じ、

②③ どの尻の分泌腺から出る油。
以下に「塗るべし」が落ちている
のであろう。

②④ 新敷鳥^②アタラシキ トリ 新
鮮な鶏。若鶏。

②⑤ 物にあたりたる鷹^②モノにあた
るたるタカ 食あたりをした鷹。

②⑥ こつほの水^②コツボのミズ 注

②⑦ 参照。

②⑧ 雨たれの赤土^②アマダレのアカ
ツチ 雨だれの落ちる所にある
洗われた赤土。土が入ると虫が
出るので、土を食べさせること
によって、寄生虫による病気が
防げる。

②⑨ 小鳥^②コトリ 雀・雲雀など。

②⑩ 足の腫る^②アシのハルル 趾屈
症になつてゐる。足の裏、体重
のかかるところが腫れる。尿酸
がたまつたり、外傷があつたり
することに依つて足の裏が腫れ
る。「足腫薬。螺の辛味、地黄、
蛇骨、薇の根、杉のやにを粉に
して醋にて付く」(放 六二八
頁)。

②⑪ かもし、の角 かもしかの角。

②⑫ 焼くへし^②ヤクベシ コテで焼
き消毒する。

②⑬ 藤こふ^②フジコブ 藤の蔓のこ
ぶ。種子は緩下剤。

一 餌こりたるには肉の肥たる故也。新敷鳥の油を飼
へし。小鳥もよし。

一 物にあたりたる鷹には新敷土餌を飼、こつほの水

煮て餌を飼、赤金を飼、塩を飼、雨たれの赤土を飼、

小鳥を飼。

一 足の腫るにはかもし、の角をこそけて酢にて付よ。指

のまたを焼へし。一夜取柳一藤こぶ煎してゆて

よ。鳥の油をぬれ。

その汁を塗るとよい。

一、餌を嫌がつて食べない鷹にはど
う対処するかという事であるが、こ
れは筋肉が肥満したからである。新
鮮な若鶏の油分を与えるといふ。小
鳥もよい。

一、食あたりをした鷹には鮮度の良
い土餌を与え、小壺の水を煮て消毒
してから餌を浸して飼い、銅・塩を
与え、雨だれできれいに洗われた赤
土を餌にくるんで与え、消化の良い
小鳥を飼う。

一、足の腫れた時には、かもしかの
角をこそけて酢で付けよ。指のまた
をコテで焼くとよい。榆柳と藤のこ
ぶを煎して、なまめる湯となつたと
ころで患部をその中に入れさせる。
鳥の油を塗れ。

⑤ ゆて(茹)よ 煎じたお湯につけよ。
⑥ 鶏の油トトリのアブラ 注④参照。

⑤ 羽をいたく打たるを痛 羽を大変強く打って痛がる。翼に関する外傷。「ハネヲカク 鷹の羽を傷めること」(放 六八〇頁)
⑥ 其煙にてむ(蒸)す 焼き赤らめた土器に注ぐ酒の蒸発する煙に伏せ籠の中で蒸させる。

⑤ 度々夜付よトタビタビ ヨルツケよ この治療を何度も夜に行え。

⑤ いのこつち イノコズチ。別名「ゴシツ(牛膝)」。「根を乾燥したものを牛膝といい、利尿、浄血、通経、脚気などに用いる。」(「薬用植物ハンド」)。

⑤ 胸気の薬トドウケのクスリ 注④参照。「甘草。人參。茯苓。はこべ黒にして。をばこの黒。沈香。しゆく地黄。黒ぢやかう少加る。是を飼なり。」(「續群書類従五百四十八」荒井流鷹書)
⑥ 地黄トジオウ 注④参照。
⑥ 耳中トミミクサ 注④参照。
⑥ 人參トニンジン 注④血尿の治療薬としても用いられている。漢方でも諸病、栄養不良・強壯補血に広く用いられる。

一羽をいたく打たるを痛にハ土器を焼て能酒を入れて
其煙にてむすへし。度々夜付よ。夜取柳いのこ
つちを煎してゆてよ。

一胸気の薬。一地黄二耳中一人參等分合飼へし。



写真1 セーカー隼の喉痺

注④を参照。首、のどが異常に膨れる。
F. A. Al-Tamimi: *Falcons & Falconry in Qatar*, 1987, Doha, P.150 より。

一、胸気の薬。地黄・耳草・人參を等分に合わせ与えろとよい。

一、羽をひどく打ち痛がる時には、土器を焼き、良い酒を入れ、酒の蒸発する湯煙で鷹を蒸すとよい。何度もこれを夜に行え。榆柳といのこずちを煎じて、温いうちに煎じ汁に浸せ。

⑤ 尾尻をつきたるハオジリをつきたる 尾尻を地面に付けてしまふ。「くる病」「尻の穴が痒い時」などに行う。

⑥ 初子ノホソ(臍)ノオ(緒) 初子は夫婦間に最初に生まれた子、長男をさす場合が多い。臍ノ緒は臍帯血をさしているものと思われる。注⑤参照。

⑦ 米の汁ハコメのシル 現在は使わない。猛禽類は骨は消化するのに穀物は消化しない。基本的に米などを受け付けるようには体が出来ていない。

⑧ 喉痺ハコウヒ 喉痺。のどが腫れふさがつて、水なども通らなくなる病氣。〔国語大辞典〕小学館「喉」は喉の異体字で「のど」のぶえ。「早(カン)」は「かわく」。

⑨ スキトウサ 「透き磐砂(陶砂)」か。陶砂は「膠(にかわ)液の中に明礬(みょうばん)を少量加えたもの。〔広辞苑〕

⑩ ス、タマ 数珠玉(ずすだま) 稲科の多年草。架をしめてハコをしめて 止まり木にしがみついて。

⑪ 隼のくミ薬 隼は捉らえた鳥の首の骨を組みついて折るものであるが、そうしようとしなない、補鳥意欲の無い鳥に与える入れ薬である。この項以下は大鷹か

⑫ 尾尻をつきたるハ一初子ノホソノオ一人参合て飼へ。

一 疲鷹を肥すハ米の汁を薄くして耳草を合せ餌に

包て飼へ。

⑬ 喉痺ノ薬。一スキトウサ一ス、タマ粉にして合て

喉へ吹入へし。こうひを煩鷹ハ架をしめてのひあ

かりて口をあくへし。

⑭ 隼のくミ薬。⑦ 人の髪の毛を十斗野に出る時ノあさ

鳥の身に包て飼へし。又馬の股の骨をこそけて

一、尾尻を地面に付けてしまふ時には、初めて生まれた人の子の臍の緒と人參を合わせて与えよ。

一、疲れた鷹を肥やすには、米の汁を薄くして、耳草を合せ、餌に包んで与えよ。

一、(トリコモナスの炎症などで)喉が腫れふさがつた時の薬は、膠液に明礬と数珠玉の粉を入れて合わせ、喉へ吹き入れるとよい。喉痺を煩う鷹は架にしがみついて伸び上がり口を開くだろう。

一、隼についてであるが、まず狩獵をする時よく組みつくようにする薬は、虱を十匹ばかり、野に出る時の

ら「隼」に移る。
 ②①人の髪の毛 しらみ。
 ②②馬の股の骨 馬の骨盤。カルシウム補充薬である。

②③大物Ⅱオオモノ 大形の鳥。ここでは雁などを指すか。隼は小さいので鶴は捉れない。かえって、やられてしまう。一般に蹴る鳥は苦手で、掴む鳥はかなり大きくても捉る。

②④薬 ここでは、薬となるような有効な方法。

②⑤景気Ⅱケイキ 物事の様子。ありさま。気配。隼は猟の前に朝日を見せに行く。その時狂(たぶ)るいするようなら小屋に戻す。早朝は寒くて捉らないので、八時頃から猟に行く。

②⑥懐薬Ⅱフトコロヤク 懐に入れて持ち歩く常備薬。

②⑦燕の子のよい毛。燕の子の肩の毛。翼の付け根の毛で、「雨覆(あまおい)」とも。燕と隼は飛行の形が同じである。

②⑧栗鼠Ⅱリス 皮をむいて内臓を出し、逆さにして干しておくとかラカラになる。

②⑨犬の血 犬は鷹の餌にする。その時に血をとる。

②⑩ほや やどり木の古名。ここは、桑の木についた寄生木。ほよ。「広辞苑」他)

②⑪萱草Ⅱカンゾウ 萱草。注②参照。(参考)甘草(カンゾウ)は

水に入、餌飼時かきたて、可飼。

一同大物に組する薬。鳥屋を別にして聞くして

能餌を飼て尿をすかして上肉を肥して七日繋

籠て景気を見習すへし。

一同懐薬。一柱ノ朽たるを粉ニス一燕ノ子ノよい毛

成を干ス一栗鼠ヲ干粉ニス犬の血にて丸して

豆程にして餌に包飼へし。又桑の木のはや耳草是

を餌に包飼。又人の唾あま酒を飼へし。

一鷹の惣薬。一切諸病に吉一耳草一人参一萱草

朝、餌とする鳥に包んで与えたとよい。又、馬の骨盤をこそげて水に入れ、餌を与える時よくかきまぜて飼うとよい。

一、隼に大形の鳥を促らせようとする時の薬となる方法。鳥屋を別にして暗くして、良質の餌を与え、消化の良い状態で尿を溜めず、筋肉を強くして七日繋ぎ籠めて、様子をよく観察し上々と見て、狩猟に飛ばせるとよい。

一、隼の常備薬。柱の朽木を粉にしたもの、燕の子の肩の毛を干したもの。栗鼠を干して粉にしたもの、それらを犬の血で丸くして豆程の大きさにして餌に包んで与えたとよい。又、桑の木の宿り木や耳草を餌に包んで飼う。又、人の唾や甘酒を与えたとよい。

一、鷹の惣薬。これは一切の諸病に

「マメ科の多年草。中国に野生し、日本ではまれに栽培される。：中略：根には甘味があり、漢方医学で、咳（せき）、腹痛、胃潰瘍などの治療に用いる。あまき。あまき。」（『国語大辞典』小学館）なお、総葉、鷹の病一般にきく薬（放 六六二頁）

㉔ 尿つまりクソつまり 鷹の便は水便であるから、基本的に尿つまりは無い。尿が出ないのである。

㉕ 川にな（蜷）河貝子。注㉔を参照。民間薬としては、「淋疾・黄疸に体及び貝殻を用いる。使用方法は黒焼にして葛粉と等分に混合し、酒で一匙ずつ酔う程に飲む。一日三回で六個分を用いる。」（『動物植物民間薬提要』という。肺ジストマ・横川吸虫等の第一中間宿主となるため、服用には注意を要する。）

㉖ 込餌 コメエ 口を開けて無理やり押し込む餌、又そのやり方。この場合のように通常では餌として食べないものを食べさせる時、又、食欲が無くなって体力を落としている時に無理やり食べさせる餌、そのやり方。『放鷹』では「コミエ」としている（一六五二頁）

㉗ 黒き所 貝の身の黒い所。腸の部分。ここに肺ジストマなどがひそんでいる。

一地黄一薬師草是を粉にして餌に包て飼へし。

君子散と云。

一尿つまりの薬。川になと云虫は貝を割て身の白き

所斗をたゝゐて十斗鷹の口をあけて込餌にすへし。黒き

所を除へし。秘事也。

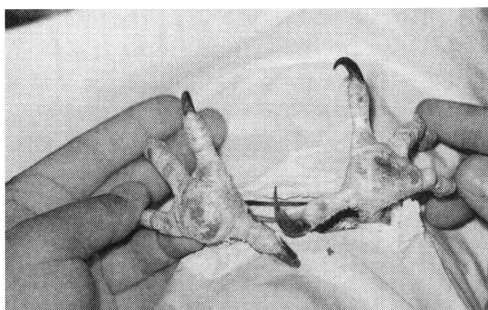


写真 2

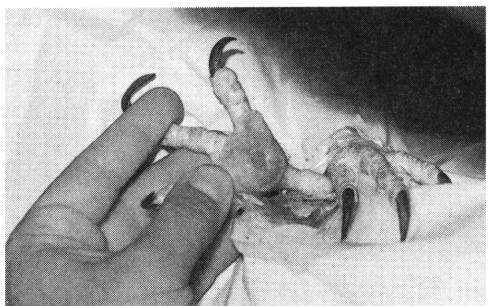


写真 3

セーカー隼の足気・趾屈病

注㉔、㉕を参照。写真3の方は赤くただれている。Al-Tamimi：前掲書、PP.136～137より。

良く効く薬である。耳草・人參・萱草・地黄・薬師草を乾燥し粉末にして餌に包んで与えたとよい。これを「君子散」と言つ。

一、糞つまりの薬には川蜷がよいのであるが、川蜷は貝殻を割って、身の白い所だけを叩いて、十ばかり鷹の口を開けて、押し込めるように食べさせるとよい。（川蜷はジストマ、横川吸虫などの中間宿主となる貝であるから）黒い腸の部分を除いて与えるべきである。秘事である。

- ②⑧ 足気Ⅱアシゲ 足の裏の出来物。趾屈症。飼っている鷹にだけ出る病。注②参照。
 ②⑨ 天南生Ⅱテンナンショウ 天南星。注②参照。
 ②⑩ そくひ(統飯) 「そくい(統飯)」の変化。「飯粒をへら状のもので押しつぶし、ねって作ったのり。」(『国語大辞典』小学館)。注②参照。
 ②⑪ いきり いきれ。熱。

- ②⑫ 児の臍の緒Ⅱコノヘソのオ 注②参照。
 ②⑬ 血にて出し、血の中へ入れてもどし。
 ②⑭ 鳥のは(羽)にて入る 鳥の羽茎をスポイトとして使って目薬を差す。
 ②⑮ 鳥の羽Ⅱカラスのハネ 民間薬として、「鳥は全身を黒焼きにし粉末にし服用。婦人病薬」(『動物植物民間薬提要』)
 ②⑯ 霜にしてⅡソウにして 粉末にして。
 ②⑰ 吹入よ 鷹匠が口に含んで吹き入れる。なお、この項、「目を打ちたる」灸所、図Ⅳ8を参照。

- ②⑱ 尾羽留Ⅱオバネドメ 尾羽が抜けてしまったら、尾羽の生長が留まる。
 ②⑲ 天花粉Ⅱテンカフン 「キカラスウリの根から採った白色の澱粉。

②⑧ 一足気の薬。天南生を紙に包、水にしめ、火に埋、むし焼にして取出し、そくひの如くおして足にはるへし。
 ②⑩ 又はいきり杯に付る也。にかわをときて此薬を付へし。
 種々の薬の中には是に過たるはなし。

②⑫ 一目をつきつるには児の臍の緒を割て血にて出し
 ②⑭ 鳥のはにて入る也。鳥の羽を霜にして目に吹入よ。

②⑱ 一尾羽留したるを出すには天花粉一栗ノイカ霜にして桑の木の楊枝にて削り入へし。度々ためしたる薬也。

一、足の裏の出来物の薬、この薬は、天南生の根を紙に包んで水にしめし、火に埋め、蒸し焼きにして取り出し、統飯のように押しつぶして足に貼るとよい。又、熱をもった所などに貼り付けるのである。にかわを溶いたものに混ぜて此の薬を貼り付けるとよい。趾屈症の薬にはいろいろ有るが、此の薬に勝るものは無い。

一、目を突いた時には、新生児の臍の緒を割って血でもどし、鳥の羽茎に含ませて目に入れるのである。また鳥の羽を粉末にしたものを鷹匠が口に含んで鷹の目に吹き入れよ。

一、尾羽の生長が留まったのを出すには、天花粉と栗のいがを粉末にしたものを桑の木で作った楊枝で毛穴

汗疹(あせも)に撒布し、また、化粧用とした。〔「広辞苑」〕

②⑧ 栗ノイカヅクリノ イガ 栗は民間薬として「乾いた葉を煎じて、うるしかぶれにその煎じ汁を塗って用いる。」「〔薬用植物ハンド②〕」とある。「いが」も皮膚病に薬効があつたのだろう。

②⑨ 桑の木の楊枝Ⅱクワのキのヨウジ 鷹道具は、桑・梨・松材を使う。桑の自生木は硬いので、楊枝・摺子木などに使われる。

③① 削り入Ⅱケズリイル ここでは尾羽の生えぎわ・毛穴などを刺激して薬を塗り込むのである。

③② 椅骨木 接骨木。庭常。スイカズラ科の落葉低木。「茎葉および花は生薬とし、煎汁を温電(おんあん)など外用薬に供する。」「〔「広辞苑」〕「椅骨木」の「椅」は「接」の誤写。ここでは饅飯の様に押し練りして付けているが、捻挫の時は葉を炒ってボロボロにして酢に浸して鷹の患部に貼ることもある。

③③ 羽虫Ⅱハムシ 羽についた虫。羽虱など。「ハムシクスリ 羽虫薬。熊膽、水銀をねり合わせて羽の根をわりて入る(放 六六一頁)」

③④ 胡麻Ⅱゴマ 「東アジア各地で栽培される一年生の草、夏、白色の小花をえき出、九月、さく果をつける。強壯、解毒。胡麻は食用、油をとる。」「〔薬用植物ハンドⅡ〕」

一足の腫たるには一椅骨木同葉をそくいの如く押合て付るなり。

一羽虫には胡麻の油にて菖蒲の根を粉にして

合せさすへし。又熊膽一燕ノ夏少屎一キラン草

一地しはりノ汁にてとき付る。

を掃除・刺激して羽のつけ根の穴に入れるとよい。これは自分が度々試したことのある薬である。

一、足の腫れた時には、接骨木の花と葉を饅飯の様に押し合わせて付けるのである。

一、羽に虫が付いた時には、胡麻の油で、菖蒲の根を乾燥したものを粉にして合わせ差すとよい。又、熊胆・燕の夏屎・キラン草を地縛りの汁で溶いて付ける。

④ 菖蒲の根ハショウブのネ。菖蒲はサトイモ科の多年生草本。「根茎を乾して『菖蒲根』と呼び健胃薬とする。」(『広辞苑』)

⑤ 熊膽ハクマノイ。熊胆。「①胆汁を含んだままの熊の胆嚢を干した物。味苦く、腹痛・氣付・強壯用として珍重。②薬用人参の古称。(新撰字鏡七)」(『広辞苑』)

⑥ 燕ノ夏少尿。ツバメノ。ナツスクナキ。クソ。夏の尿は水分が少なく少量になり、粘着力がある。

⑦ キラン草。金瘡小草。シソ科の多年草。じごくのかまのふた。

⑧ 地しはり。地縛(じしばり)。キク科の多年草。いわにがな。各地の田畑や路傍に生える。タンポポに似た黄色花をつける。

⑨ 鼻氣ハハナゲ。鼻の病。鼻づまり。ダニが鼻へ入ると起る。「参考。鼻汁は免疫を子に与える時にも出す。」灸所、図17、8を参照。

⑩ 胡枰ハコショウ。胡椒。クシヤミをさせて鼻からダニを出すのである。

⑪ ヒトモシ。一文字。葱をいう女房言葉。

⑫ アケビ。木通。通草。アケビ科の蔓性落葉低木。「蔓の輪切の乾燥物が木通で利尿鎮痛、通経薬。」(『薬用植物ハンド』)

⑬ 皂角子。皂(ソウ)は「阜(ソウ)」の俗字。どんぐり。とちくぬぎなどの実。

⑭ 大根ハダイコン。スズシロ。「新鮮な根は消化不良・吐血・下痢に、乾燥した根はせき止め・去痰

一鼻氣には一胡枰一ヒトモシノ根一アケビノ蔓煎

して鼻へ吹入ル。又胡枰又皂角子を粉にして

鼻へ吹入へし。又大根を細かに削り鼻穴へ入へし。

又丁字ノ節もよし。

一、鼻づまりには、胡椒・葱の根・

アケビの蔓を煎じて鼻へ吹き入れる。又、胡椒とかドンケリの実とかを粉にして鼻へ吹き入れるとよい。

又、大根を細かに削り、鼻の穴へ突っ込んでおくとよい。又、丁字の節を削って入れるのもよい。

に用いる。」(『薬用植物ハンド
②
③ 丁子ノ節II ヨウジノフシ 注③
参照。
④ 以下の「鼻氣」の治療法は、すべ
てクシヤミを誘うことを目的と
した刺激を与えようとするもの
である。『放鷹』には、「ハナゲ
鼻氣。煙るところに鷹をつなぎ
置けば鼻つまりて水など出る病
(六八〇頁)、また、「ハナゲウチ
クスリ 鼻氣内薬。鼻のつまり
を直す薬。楊梅皮、丁子、桂心、
蟬蛻を粉にして用ゐる。その他
にも種々の處方あり」(六八〇頁
とある。

図
VII

使った鷹を温め手入れをする。
火針も描かれるはずであったが、図中には見当たらない。
『絵本鷹かがみ』(暁斎記念館 昭和六十年復刻) 五十一頁より。